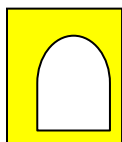


日吉台地下壕保存の会会報



第121号

日吉台地下壕保存の会

会長就任のご挨拶

阿久沢 武史

今年度の日吉台地下壕保存の会の総会が、6月6日に慶應義塾大学来往舎シンポジウムスペースにおいて行われました。当日は総会に先立ち、吉田鋼市氏から「横浜の戦争遺跡—いくつかの実地検分からの報告」と題するご講演をいただき、総会では今年度の活動方針等が承認されました。詳細に関しましては、本会報(3~8p)をご参照ください。

さて、このたび大西章前会長のご退任に伴って会長の任を引き継ぐことになり、総会でご承認をいただきました。この場をお借りして、あらためてご挨拶を申し上げます。



私は慶應義塾高校で国語科の教員をしております。私が慶應の教壇に初めて立ったのは1990年の4月。最初に教えた1年生のクラスの担任が寺田貞治さん、2年生のクラスの担任が大西章さん、ともに会の立ち上げと発展にご尽力された大先輩です。そのバトンを受け渡されたことに不思議な縁を感じずにはいませんし、私にとっては重いバトンとなります。

日吉に残された旧海軍の戦争遺跡から、我々はどのようなことを知り、考え、発信することができる

のか。どのように保存し、後世に伝えていくのか。我々はどうすれば「戦争」という愚行を繰り返さずに未来へ進めるのか。重いバトンを落とさないよう両手でしっかりと握りながら、微力ながら力を尽くしてまいりたいと思います。

「人間の行動の記録は、良いものも悪いものも残しておくべきだ。そして残そうとする熱意とエネルギーによって、残るものと残らないものが決まっていく」——先日の講演会での吉田鋼市氏の言葉です。この言葉を1989年の発足から今年で26年目を迎える保存の会へのエールとして受け止め、私自身の今後の活動の起点にしていきたいと思っています。とりわけ今年は、「戦後70年」という節目の年となり、日吉台地下壕に対して、これまで以上に強い関心が多方面から寄せられると思います。今後とも皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

目次

巻頭言	会長就任のご挨拶 (阿久沢武史)	1 p
お知らせ	「第19回戦争遺跡保存全国シンポジウム大会」開催	2 p
報告	第27回日吉台地下壕保存の会講演会・総会	3-8 p
感想	記念講演「横浜の戦争遺跡」を聞いて (石橋星志)	8-9 p
寄稿	2015ガイド養成講座を受講して (大久保佑香里)	9 p
寄稿	日吉台地下壕を見学して (吉原美沙恵)	10 p
報告	日吉台地下壕の報道関係者向け特別公開	10-12 p
報告	2015年度応援事業「チャレンジコース」結果報告 (小山信雄)	12 p
お知らせ	港北図書館パネル展・講演会を開催します (小山信雄)	13 p
報告	「横浜大空襲から70年」 (吉沢テイ子)	13-14 p
連載	地下壕設備アレコレ【14】 (山田譲)	14-15 p
訃報		15 p
活動の記録		16 p

お知らせ**「第19回戦争遺跡保存全国シンポジウム千葉県館山大会」開催のお知らせ**

◇日時：2015年9月5.6.7日(土日月)

◇全体会場：千葉県南総文化ホール 分科会場：館山市コミュニティセンター

◇主催：戦争遺跡保存全国ネットワーク

第19回戦争遺跡保存全国シンポジウム千葉県館山大会実行委員会

◇共催：NPO法人安房文化遺産フォーラム

◇後援：館山市、館山市教育委員会、館山市観光協会、千葉県歴史教育者協議会

◇参加費：1日券 1,000円／2日券 2,000円 大学(院)生：半額 高校生以下：無料
全国交流会 2,000円／弁当代(5.6日) 800円【要予約】

フィールドワーク：Aコース 2,500円／Bコース 1,000円【要予約】

※開催要項・申込書はホームページ(<http://bunka-isan.awa.jp/>)よりダウンロード可。

郵便振替口座：00270-3-102723 名義：第19回戦跡シンポジウム館山大会

◇大会趣旨：2004年の第8回館山大会から10年を経て、市民が主役の文化財保存運動は多くの成果を上げてきました。館山海軍航空隊赤山地下壕(館山市指定史跡)、里見氏稲村城・岡本城跡(国史跡)、青木繁『海の幸』誕生の小谷家住宅(館山市指定文化財)等。現在は、戦跡をはじめ多様な文化遺産(ヘリテージ)を「館山まるごと博物館」として、まちづくりに活かす取組みを民官協働で進めています。日本列島の頂点で太平洋に開かれ、古くから要衝の地である館山市は、幕末から台場が置かれるなど重要な軍事施設がつくられ、本土決戦に備えた兵の配備、米占領軍による「4日間」の直接軍制の時期等を経て来た一方、海路を通じて多民族が交流・共生し、1948年には館山ユネスコ協力会が設立されました。「戦後70年」にあたる本年、戦後日本のスタートの地となった館山市から「平和の文化」を心に刻み、市民が主役のまちづくりがさらに各地で展開していく契機になることを願っています。

◇プレイベント 9月5日(土)

*見学会 館山海軍航空隊赤山地下壕跡 9:30～11:45 無料ガイドサービス

*映画会 『赤い鯨と白い蛇』10:00～11:45 南総文化ホール小ホール

◇全体会 9月5日(土) 13:00～16:15 千葉県南総文化ホール小ホール

*開会セレモニー 語り『富田先生の青い目の人形』実行委員長 松苗禮子

*記念講演「平和と文化」と戦後70年の祈り 河 正雄氏 韓国光州市美術館名誉館長

*パネルディスカッション 「戦跡と文化財を活かしたまちづくり」

*全国ネット会員総会 16:30～17:30

*全国交流会 18:00～20:00 千葉県南総文化ホール大会議室【要予約】

◇分科会 9月6日(日) 9:15～16:00 館山市コミュニティセンター

*第1～3分科会(保存運動の現状と課題など)

*特別分科会「米占領軍の館山上陸と直接軍制／証言者のつどい」

◇フィールドワーク(バスツアー) 9月7日(月) A・Bコース【共に要予約】

*Aコース 9:00～15:00(ガイドブック・昼食付／定員40名)

館山海軍航空隊跡、アメリカ占領軍上陸地、青木繁『海の幸』誕生の家など

*Bコース 9:00～12:30(ガイドブック付／定員20名)

大房岬要塞群、特攻隊「桜花」下滝田基地跡など

報告 第27回 日吉台地下壕保存の会 講演会・定期総会**総会資料**

日 時： 2015年6月6日(土) 12:30 開場
 場 所： 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース
 主 催： 日吉台地下壕保存の会

2014年度活動報告

- ◇会員数： 個人 351名 交換・寄贈団体 65団体
- ◇定期総会開催： 第26回 2014年6月7日 来往舎大会議室
 記念講演 『近代都市の形成と軍隊—横浜・横須賀を中心に』
 上山和雄氏(横浜市文化財保護審議会委員)
- ◇運営委員会開催： 5月～4月 11回
- ◇会報発行： 5回 115号(5/2) 116号(7/7) 117号(9/19)
 118号(12/5) 119号(2/26)
- ◇地下壕見学会： 2014.5～2015.4 60回 2,291名
 2月27日～6月まで安全点検のため入坑中止となった地下壕見学会は、7月14日から再開した。慶應義塾による非破壊検査の結果、1ヵ所コンクリートと地層の間に間隙が見つかり、以後その部分を通行禁止にした。コンクリートの強度については現在の建築基準を満たす値で劣化の心配は無いことが判った。入坑中止期間は地上の案内を工夫して行った。神奈川県立歴史博物館の企画展「陸にあがった海軍」(2015年1月31日～3月22日)の現地見学会として、3月7日に70名を案内した。2月から慶應義塾高校生徒会による、月1回の地下壕見学会が始まった。
- ◇ガイド学習会： 2014.5月～2015.4月 7回 菊名フラット
 見学会ガイドの連絡・学習会。2011年作成の『ガイド事例集』に続き今年度は『ガイドポイントマニュアル』を作成した。
- ◇「第19回平和のための戦争展inよこはま」： 5月30日～6月1日
 神奈川県民センター 展示参加 日吉台地下壕紹介・日吉地域の空襲被害等
- ◇第18回戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県川崎大会開催〈今こそ戦争遺跡を平和のための文化財に！〉： 8月16日～18日 明治大学生田キャンパス 共催 明治大学平和教育登戸研究所資料館 後援 神奈川県・川崎市等 延べ参加人数962名
 - 16日：登戸研究所見学会・記念講演「アジアの平和と日中関係のこれから」丹羽宇一郎氏(前中国大使・前伊藤忠会長)・全国ネットワーク会員総会・文化行事・基調提案・地域報告・全国交流会
 - 17日：分科会 第1分科会「保存運動の現状と課題」・第2分科会「調査の方法と整備技術」・第3分科会「平和博物館と次世代への継承」



長谷川副会長による挨拶

第3分科会で「戦争遺跡を間近で見学できない時のガイドについて」を報告
(喜田美登里・山田淑子・小山信雄運営委員)

18日: フィールドワーク(日吉台地下壕・東部62部隊・東京大空襲と第五福竜丸・多摩地域の戦争遺跡)

○関連企画「パネル展 平和のための戦争遺跡の保存を求めて」: 7月16日～10月25日 明治大学平和教育登戸研究所資料館

◇バスツアー: 10月26日 「東京の戦跡バスツアー」 ガイド 川口重雄氏 15名参加(第五福竜丸展示館―東京大空襲戦災資料館―東京都慰霊堂他)

◇第8回日吉フェスタ: 11月1日 慶應義塾大学日吉エイジ主催(学生と地域住民参加の事業) 書籍販売・キャンパスツアー2回実施

◇日吉地区センター自主事業「地域再発見 日吉台地下壕について」: 11月10日・20日 日吉台地下壕について、座学・見学を2日間で実施。毎年定員40名を超える応募がある。

◇第9回公開講座: 1月31日 来往舎大会議室

「地下壕の時代、青空の時代」小沼通二氏(慶應義塾大学名誉教授 物理学者)

◇港北図書館パネル展示・講演会: 展示 12月1日～28日・ミニレクチャー14, 21日(図書館 港北まちの情報コーナー) 7日 講演会(会議室)

◇港北区地域のチカラ応援事業

中間報告会: 11月15日 来往舎シンポジウムスペース

最終報告会: 3月26日 港北区役所

◇ガイド養成講座: 第8期 2014. 1月～6月 修了者6名

第9期 2015. 1月～5月 修了者6名

◇冊子『戦争遺跡を歩く 日吉』第7版改訂発行 5000部 : 1月5日

◇聞き取り調査

日吉地下壕勤務の暗号兵、電信兵の方々の聞き取り調査を行った。

◇新聞記事等

戦後70年を意識した 地下壕紹介記事、8月の戦争遺跡保存全国シンポジウム関連記事、県立歴史博物館企画展関連記事等、多数掲載された。

2015年度 運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問

会 長 阿久沢 武史

副会長 新井 揆博 亀岡 敦子 鈴木 順二 長谷川 崇 羽田 功

運営委員	石橋 星志	岩崎 昭司	上野 美代子	遠藤 美幸	岡上 そう
	岡本 秀樹	喜田 美登里	小山 信雄	桜井 準也	佐藤 宗達
	杉山 誠	鈴木 清俊	谷藤 基夫	常盤 義和	中沢 正子
	古川 晴彦	宮本 順子	茂呂 秀宏	山田 譲	山田 淑子
	渡辺 清				

会計監査 熊谷 紀子 山口 園子

顧 問 鮫島 重俊 白井 厚 東郷 秀光

2014年度 決算報告

(単位 円)

費 目	2014 年度予算	2014 年度決算	備 考
【収入の部】			
会費	310,000	322,730	236 名
見学会資料代	400,000	624,477	内訳別項
図書等頒布	0	131,532	
寄付金等	0	28,000	
港北区補助金	0	102,500	港北区地域のチカラ応援事業
繰越金	323,669	323,669	
計	1,033,669	1,532,908	
【支出の部】			
運営費	100,000	175,630	各種会合・打ち合せ等
事務費	120,000	170,333	事務用品費等
印刷費	70,000	97,991	会報・資料等
通信費	200,000	229,754	会報郵送費等
図書資料費	150,000	119,760	参考書籍 35,760 円、販売書籍 84,000 円
交流・交通費	80,000	88,086	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	50,000	70,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	459,000	
予備費	63,669		
計	1,033,669	1,410,554	
差引残高		122,354	

見学会開催費用内訳

収入の部		支出の部	保険料	114,120
見学会費用	923,609		振込手数料	1,512
			案内経費	183,500
			※資料作成費	624,477
合計	923,609		合計	923,609

※資料作成費は 2014 年度決算の見学会資料代に計上しています。

以上の通り報告します。

2015 年 5 月 31 日

日吉台地下壕保存の会

会 計 亀岡 敏子



この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 熊谷 紀子



会計監査 山口 陽子



2015年度 予算 (単位 円)

費 目	2015 年度予算	備 考
【収入の部】		
会費	320,000	
見学会資料代	500,000	
図書等頒布	100,000	
寄付金等	0	
繰越金	122,354	
合計	1,042,354	

【支出の部】		
運営費	130,000	各種会合・打ち合わせ等
事務費	120,000	事務用品費等
印刷費	70,000	会報・資料等
通信費	200,000	会報郵送費等
図書資料費	130,000	書籍・資料等
交流・交通費	100,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	50,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	5000 冊(2500 冊分)
予備費	42,354	
合計	1,042,354	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました。

2015 年 6 月 6 日

日吉台地下壕保存の会運営委員会

2015 年度 活動方針

慶應義塾日吉キャンパスは、先の大戦で空襲による甚大な被害を蒙っただけではなく、戦中は海軍に貸与・利用され、戦後は連合軍に接収された苦しい歴史をもっています。キャンパス全体が戦争の愚かしさと悲惨さを伝える「歴史の研究と学習の場」であると言えるでしょう。

日吉台地下壕保存の会は、1989 年 4 月に慶應義塾の教職員と地域住民の有志約 100 名で発足し、以来 26 年間、紆余曲折はありましたが、以下のような活動を続けてきました。会独自の活動としては、調査研究・体験者からの聞き取り・見学案内・講演会開催・ガイド養成・会報発行・書籍出版などがあります。また、神奈川県内の戦争遺跡保存団体と協力しての戦争展の開催や参加、戦跡保存全国ネットワークの全国シンポジウムの開催（過去 3 回）と参加など、他の団体やネットワークの間でも重要な役割を果たしてきました。

戦後 70 年の今年は、新聞やテレビが戦争関連の特集を組むのをはじめとして、映画や出版でも数多くの優れた作品が誕生しています。私たちは、今年度も市民団体としての独立性を保ちながら、慶應義塾と良好な連携を続け、活動の場を広げる努力を続ける所存です。

日吉台地下壕は、戦争の実態を語り伝えることのできる数少ない戦争遺跡のひとつです。戦後 70 年を経たいま、その役割はさらに大きく多様になっていると思います。以上を踏まえ、2015 年度の活動として、以下の方針を提案します。

活動方針

- 文化財指定早期実現を文化庁・神奈川県・横浜市に働きかけ、地下壕を保存する。
- 慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きかけを、港北区民をはじめとする地域住民と協力して行う。
- 小・中・高校生及び広く一般市民などに対して平易でわかりやすい見学会を実施する。
- 戦争遺跡保存全国ネットワークの会員団体として、全国的な保存活動に参加する。
- 日吉台地下壕見学会の内容をより充実させるために、ガイド養成講座・講演会・学習会を開催し、運営する。
- 横浜・川崎平和のための戦争展を開催する。
- 神奈川県内の他団体と連携し、日吉台地下壕についての展示や講演を行う。
- 日吉台地下壕の学術調査・研究を深める。
- 運営委員会の活動をより一層充実させる。

記念講演資料

『横浜の戦争遺跡—いくつかの实地検分からの報告—』2015.6.6 吉田鋼市

1. 旧海軍航空技術廠支廠

- ・金沢区大川6-1(当時は東洋テルミー株式会社敷地)に鉄筋コンクリート造のやぐら状の倉庫が3つ(雷管庫、爆薬庫、信管庫)、鉄筋コンクリート造の地下貯水槽が1つ(当初は3つ)あった。昭和16年4月頃の竣工。2001年7月に調査したが、大規模集合住宅の敷地となって解体、現存せず。
- ・倉庫は間口約8.3m、奥行き約10.1m~12.3m、天井高約5.4m。鉄筋コンクリート造の二重殻構造で、ヴォールト天井、内部は杉板張り。内殻の壁厚は約15cm。
- ・地下貯水槽は37.3m×22.8mの矩形平面で、同形同大の二つのスペースに分けられ、さらにそれぞれがW字形のスペースに分けられている。壁・床・天井(W字形スペース毎にヴォールト天井が架けられている)とも鉄筋コンクリート造で、強い内転びの壁の壁厚は最も厚い下部で約2.2m、W字形の内壁の壁厚は約82cm、天井高さは約4.9m。

2. 日吉5丁目の日吉台地下壕入口遺構

- ・二つの坑道入口を2004年4月に緊急調査。現在は住宅の敷地となって一部破壊されたようだが、ほぼ並行して走る四つの坑道の入口の残り二つは健在の様様。
- ・一つは出入口に設けられたコンクリート構造物で、厚さ2尺で幅3間のスラブを左右両脇で支持する7.5寸厚さの袖壁からなる。前面には土砂が堆積、すぐ奥をコンクリート壁が塞いでおり、奥行きは不明。
- ・もう一つの坑道は、床・壁・天井ともコンクリート造、奥行き24.9mのところコンクリート塊によって塞がれている。その背後に東海道新幹線のトンネルがある模様。出入口から4.7mまでは緩やかな下り斜面で、その後水平床となる。水平床の部分は、入口に近い5.87m分の内法幅が1.93m、ヴォールト天井の天井高が2.14m、その奥の部分の内法幅が2.53m、天井高が2.41m。

3. 日吉本町3丁目の日吉台地下壕遺構

- ・全部で10本あるとされる東西方向の坑道のうち、4本を2004年10月に実見。その後、坑道上部の民家の保護のために坑道の一部が流動化処理工法で埋め戻された模様。
- ・4本は、9本の南北方向の坑道で相互につながれている。ただし連絡路は直交せず67.5°方向の斜めに、阿弥陀籤のように交わっている。東西方向の坑道の幅と高さはともに約2.5m、南北方向の坑道は幅・高さとも約3m。つまり東西方向がむしろ連絡路で、南北方向に主たる機能が置かれたか。
- ・基本的には構造はコンクリートであるが、仕上げをしていない素掘り状態のもの、あるいはまた大谷石を張った仕上げのものもあり、全体的に未完成の印象があり、現実には使われるまでには至らなかった模様。

4. 野島掩体壕

- ・金沢区金沢町の野島公園内の野島山に設けられた飛行機格納用大型隧道。2013年11月に実見。横須賀海軍の第三〇〇設営隊(日吉台地下壕連合艦隊司令部作戦室の建設にも携わる)により、昭和20年3月から6月に建設されたとされる。未完成で実際には使用に至らなかった。



講演中の吉田鋼一氏

- ・長さ約260mのトンネル。出入口の幅約20m、高さ約7m、トンネルの中央部分は幅約10m、高さ8m。出入口付近はコンクリートが打設されているが、中央部分は素掘り状態。

5. 奈良弾薬庫

- ・青葉区奈良町の「こどもの国」内にある半洞窟式弾薬貯蔵庫。2014年11月に実見。昭和14年以降、各種火薬類の貯蔵、弾薬類の製造・保管のために33か所の弾薬庫が設けられ、その他に陸軍兵器学校火工科生徒の分教所や陸軍兵器行政本部直轄の火工作作業班が設置され、旧陸軍最大の弾薬工場であったとされる。いわゆる「田奈部隊」。現在確認できる弾薬庫は10基。
- ・幅約25～30m、奥行き約7mの矩形平面で、高さ約4m。入口は左右2か所に突出して設けられており、全体としてコの字型の平面となる。屋根には換気塔が2～6個ついている。壁はコンクリートで、内装に木材を張り、その表面を銅板で覆っている。床はリノリウム張り。

6. 「負の世界遺産」

- ・ゴレ島（1978年登録、セネガル、奴隷貿易の拠点）、アウシュヴィッツ強制収容所（1979年登録）、ガーナのベナン湾沿いの城塞群（1979年登録、黄金海岸、奴隷貿易）、原爆ドーム（1996年登録）、ロベン島（1999年登録、南アフリカ、政治犯強制収容の監獄島）、モスタル旧市街の古い橋の地区（2005年登録、ボスニア・ヘルツェゴビナ、1993年戦争で破壊、2004年再建）、アープラヴァシ・ガート（2006年登録、モーリシャス、クーリー貿易）、ビキニ環礁核実験場（2010年登録、マーシャル諸島、1946～58年まで核実験）
- ・世界遺産登録基準の「顕著で普遍的な意義を有する出来事、現存する伝統、思想、信仰または芸術的、文学的作品と直接にまたは明白に関連するもの」に基づくものが多いが、世界遺産委員会は他の基準との併用が望ましいとしている。
- ・戦争で破壊された村全体を保存しているオラドゥール・シュル・グラヌ（フランスの歴史的記念建造物—日本の国宝・重要文化財に相当—指定）という特異な例もある。



ゴレ島（セネガル／西アフリカ）
1978年登録、奴隷貿易の拠点

感想

記念講演「横浜の戦争遺跡—いくつかの現地検分からの報告—」を聞いて

運営委員 石橋 星志

2015年6月6日に、今年度の総会に先立って、記念講演が行われました。今年度は、建築史が専門で、横浜市の文化財保護審議会の委員を務めておられる吉田鋼市氏に講師をお願いしました。吉田さんの専門はアール・デコ建築ですが、横浜国大の名誉教授でもあり、横浜の近代建築の研究と保存に携わられてきた方です。

「横浜の戦争遺跡—いくつかの現地検分からの報告—」のタイトルで、解体前にかろうじて調査できたものも含め、金沢区の海軍航空技術廠支廠、日吉の軍令部第三部・航空本部地下壕民有地側出入口、日吉の艦政本部地下壕、金沢区の野島掩体壕、青葉区の奈良弾薬庫（こどもの国）の5ヶ所を紹介されました。

貴重な現場での写真、関連写真も豊富に見せていただきながら、それぞれを実地検分時の状況や構造等の検討、当時の使われ方などについて、お話をしていただきました。細かな寸法や構造と用途の関係などは、専門的でありながら具体的で、分かりやすいものでした。

また、話のまとめでは、「負の世界遺産」と題して、アウシュヴィッツ強制収容所跡や原爆ドーム、奴隷貿易に関係する遺跡、南アフリカの政治犯収容所ロベン島、ビキニ環礁核実験場などを紹介し、その意義を考察していただきました。また、その中には、ドイツの空襲で破壊され、復元された建物が世界遺産になっているワルシャワ旧市街の特異性と選出までの議論も紹介されました。単に、普遍的な意義を有する文化や伝統の遺跡だけでなく、人類の足跡を示す、負の側面の保存が重要であるという話は戦争遺跡にとっても重要な観点だと感じました。

質疑にも丁寧に応じていただき、絹糸倉庫などの近代建築物が多くある横浜で、そうした歴史的経緯にも関わらず、多くの建物が破壊されていること、コストの問題はあっても、何とか残したいというお話は、戦争遺跡保存にも共通する思いで、保存運動の連携が可能ではないかと感じました。

また、地下壕の文化財指定に向けて、どのような動きが必要なのか、具体的には市の文化財指定を目指すために何をすべきかの質問には、市の文化財保護審査会でも日吉台地下壕の話が何度か出されており、一般市民にも多くが保存に前向きになること、理解を得ることが大事であることをご指摘いただきました。

それを聞いて、具体的にはガイド活動が、そうした理解を得る要になるだろうと感じました。保存の会としての調査研究の重要性や、他の近代建築と一体となった保存運動なども考えることができると思いました。今後とも、吉田さんに、第一校舎やチャペル、寄宿舎などについて専門的な立場からの検討やアドバイスを伺いたいとも強く思いました。

寄稿 ガイド養成講座を受講して 大久保 佑香里

私がこの日吉台地下壕の存在を知り、初めて足を踏み入れたのは2009年のことでした。そこから6年の月日が経ち、縁あって戦後70年という節目の年にガイド養成講座を受講し、先日修了証書をいただきました。

講座では、先輩方の持っておられる膨大な量の知識と資料、そして学ぶことの多さに圧倒されましたが、その反面この地下壕がそれだけの歴史を背負った場所であるということを改めて痛感し、身の引き締まる思いがしました。また、当時壕内で勤務されていた体験者の方のお話を聞き、70年ぶりに壕に入坑する場面にも立ち会いましたが、壕内で「当時のにおい

がまだ残っている」とおっしゃっていたのがとても印象的でした。

戦争を知る世代が去り、戦争を知らない世代が増える中、私たちは遺跡や史料に主眼を置き、物から当時の状況を学ぶ必要に直面しつつあります。体験者ではない者が戦争をどう伝えるのか。それは難しい課題ですが、先輩ガイドの方々に続いて、私もその一端を担えるようになりたいと思います。今後共、一層のご指導をよろしくお願いいたします。最後になりましたが、講座開講にあたり、準備・コーディネート・講義をしてくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



ガイド養成講座修了証書を受け取る大久保佑香里さん

寄稿

日吉台地下壕を見学して

2015, 4, 22 吉原 美紗恵

日吉に住んで50年近くになる。この地に地下壕が残されていると知ったのは、いつの頃だったか?一度は入ってみたい、見学してみたいという思いを抱きながら、今回に至ってしまった。先ずもって、この機会を与えて下さった富士見会の方々に感謝したい。本当に見学させて頂いて良かったという思いでいっぱいである。

地下壕は、ヒンヤリして肌寒い位だった。そこは、地上の喧騒とは異なる全くの別世界だった。戦争末期のわずか3か月間で、入り組んだ迷路のような、2,6*にも及ぶ地下壕を造り上げた、当時の技術力に驚く。物資の乏しい頃、私など4歳ぐらいだったが、防空壕の中でお椀に入った大豆ばかり食べさせられて、未だに体にはいいと言われても、大豆食品は食べたくない。一生分食べたという思いがしみついているからだ。

そんな時に、これだけの工事の出来る物資を、日本は持っていたのだという事実。優秀な土木技術も、素人の私にも、十分伝わるものだった。立派な壁、排水、通風、照明設備、どれをとっても驚くばかりであった。次々と係りの方が順番に解説して下さったが、静かな語り口の中に、反戦への思いが溢れており、それこそがこの地下壕の見学から学ぶべきことだと思った。

特に、特攻隊出撃の際には、「ツー」だけの通信音にするという話。その音が途絶えた時が任務を全うしたとされるという話は、あまりにもむごく切なかった。特攻隊員だったという叔父さんを亡くされたA氏は、どんな思いだったことだろう。そうやって多くの特攻隊員が尊い命を落としていったのだ。その出撃命令がここから出されていたとは。

外に出ると、明るい日差し溢れる世界。この歩いている地下で何があったのか1人でも多くの人々が知らなければならない。一見平和な時代だが、ゆめゆめ油断してはならない。そんな思いにさせられた2時間半だった。分かり易く親切に解説して下さったボランティアの方々に心から感謝します。

報告

日吉台地下壕の報道関係者向け特別公開

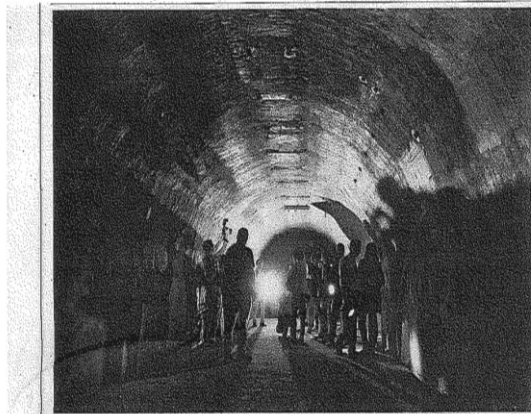
2015年(平成27年)6月24日(水曜日)



6月23日(火)にテレビ、通信社、新聞社等マスコミ各社に対し、慶應義塾による日吉台地下壕の特別公開が行われました。当日は阿久沢会長の案内により、午前と午後の2回に亘って合計17社(◎詳細下記)、21部署の報道関係者が地下壕を取材し、当日の夕方にはテレビ各社で一斉報道され、翌日の新聞でも大きく取り上げられました。AP通信社によれば世界500社以上の通信社に配信され、ワシントンポスト、ニューヨークタイムズ、ヴォイスオブアメリカ、ジャパントイムズ等に掲載されました。

◎

NHK、日本テレビ、TBS、フジテレビジョン、テレビ朝日、イッツコミュニケーションズ、時事通信社、共同通信社、AP通信社、毎日新聞社、日本経済新聞社、朝日新聞社、朝日学生新聞社、産経新聞社、読売新聞社、神奈川新聞社、東京新聞社



迷路のような暗い通路を歩きたどりついた地下作戦室。大戦末期に沖繩戦なども指揮したという 一三日午後、横浜市港北区

連合艦隊司令部跡を公開

慶応大構内 沖繩戦など指揮

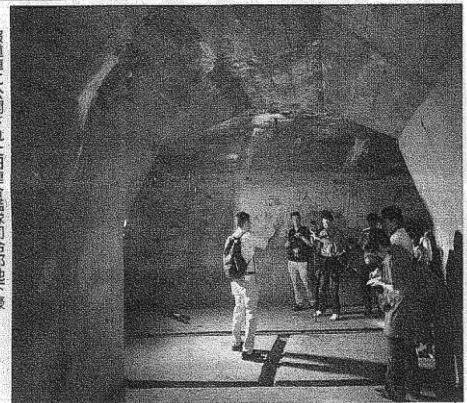
先の大戦末期、慶応大学日吉キャンパス(横浜市港北区)に掘られた連合艦隊司令部跡が23日、戦後70年の節目を機に報道関係者に公開された。

昭和19年、旧海軍は本土決戦に備え慶応大から敷地や建物を借り、総延長約5キロに及ぶ巨大な地下要塞施設を建設、中核機能の多くを移転させた。地下壕の内部には、司令官官舎や作戦室、電信室の跡などが残されている。

23日に慰霊の日をむかえた沖繩戦やレイテ沖海戦、真も)

(写真報道局 奈須 写)

報道陣に公開され、旧連合艦隊司令部跡、横浜市港北区(左)日吉、(右)太一写す



記憶の「語り部」今に

日吉台地下壕、特別公開

太平洋戦争末期に、旧日本海軍の連合艦隊司令部が置かれた慶応大日吉キャンパス(横浜市港北区)の地下壕が23日、戦後70年に合わせて報道関係者に特別公開された。

1944年に掘られた地下壕の総延長は約5キロ。キャンパス内にある入り口から急坂を下ると、真つ暗い通路が続く。天井の高さが3メートルある広い作戦室や約30台の短波受信機で無線を受けた電信室、暗号室などが内部に設けられていた。

悪化する戦況報告が各地から集まり、沖縄特攻作戦へ向かう途中の4月、鹿児島県沖で撃沈された戦艦大和への出撃命令はここから出された。

案内役を務めた「日吉台地下壕保存の会」の阿久沢武史会長は「戦争の記憶を語る人が減る中、地下壕は戦争を伝える物証として貴重な存在だ」と話していた。(佐野 克之)

THE JAPAN TIMES SATURDAY, JUNE 27, 2015

national

THE JAPAN TIMES SATURDAY, JUNE 27, 2015 37

Secret navy bunker gives a glimpse of war's final days

Facility stands despite growing calls to scrap WWII sites

Mari Yamaguchi
Yokohama

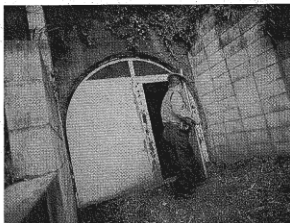
On a hillside overlooking an athletic field where high school students play volleyball, an inconspicuous entrance leads down a dusty, slippery slope — and seemingly back in time to the Imperial Japanese Navy headquarters in the final months of World War II.

Here, leaders of Japan's combined fleet command made plans for the fiercest battles, including those of Leyte Gulf, Iwojima and Okinawa from late 1944 to the war's end in August 1945.

They knew when kamikaze pilots crashed to their deaths when communications with their planes stopped. They cried when they monitored cables from officers aboard the famed battleship Yamato as it came under heavy U.S. fire and sank off southern Japan.

Today, the barren, concrete tunnels sit quietly underneath a high school and university campus, largely untouched and unknown, occasionally visited by guided tours for the students. The school opened them to the media for the first time this week to raise public awareness of the site and the tragic history it represents, in the 70th anniversary year of the end of World War II.

It's a negative heritage that humans made. It's the perpetrators' legacy," said Takeshi Akuzawa, assistant headmaster of Keio Senior High School, who escorted the media tour on Tuesday. "Just imagine, the



A security guard closes the metal entrance to underground tunnels that were once used as secret headquarters by the Imperial Japanese Navy at Keio University's Hiyoshi campus in Yokohama, on Tuesday. AP



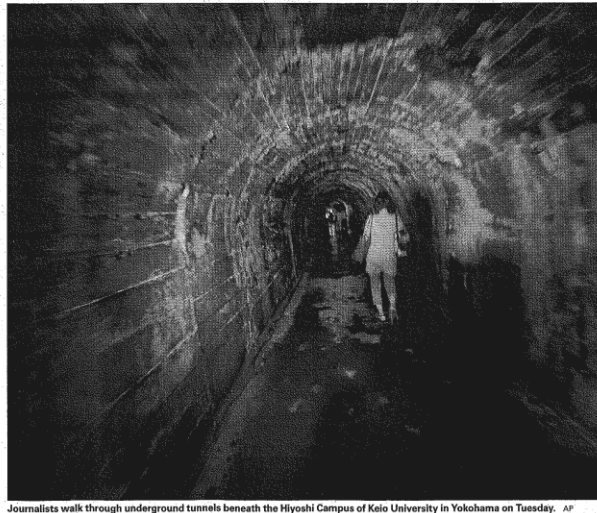
A student walks into a Keio Senior High School building that was partially used by the navy during World War II. AP

massive number of people who had to die in the final year of the war because of their operations."

The inverted U-shaped tunnels are a silent reminder of a time when students and many others were sent to war, many to their deaths, under orders that emanated from this bunker under a school.

Experts say the significance of such war remains is increasing, especially as that era fades from memory, and amid a growing reluctance among some Japanese to look at the negative side of Japan's wartime history.

One of the top Japanese universities, Keio leased the site to the navy in 1944 under an Education Ministry order, after thousands of teachers, staff and students were drafted and sent to the battlefield.



Journalists walk through underground tunnels beneath the Hiyoshi Campus of Keio University in Yokohama on Tuesday. AP

leaving the campus virtually empty. Above ground, the navy commanded from a dormitory, rushing to the underground command center whenever U.S. B-29 bombers flew over.

Keio's Hiyoshi campus, in Yokohama, was chosen apparently because of its relative proximity to both the Yokosuka naval base and command headquarters in Tokyo. The hill-

top campus also was suitable for an underground facility. Construction of the underground tunnels began in July 1944, mobilizing troops and Korean forced laborers. A room for the chief commander, Adm. Soemu Toyota, and key departments were up and running in a few months.

Only in the chief commander's room, cement on the walls was smoothed out, the floor was covered with tatami mats and there was a door. He climbed up and down 126 stairs between the two command centers — above and below ground. His room was slightly elevated so that the floor remained dry, and there was even a flush toilet.

The tunnel command center also had ventilation ducts, a battery room, food storage with ample stock of sake, in

addition to deciphering and cable and communications departments. Marks on the ceiling remain from where overhead lights hung. The tunnels housing the command center and its facilities under the campus are 30 meters underground and stretch about 2.5 km in length.

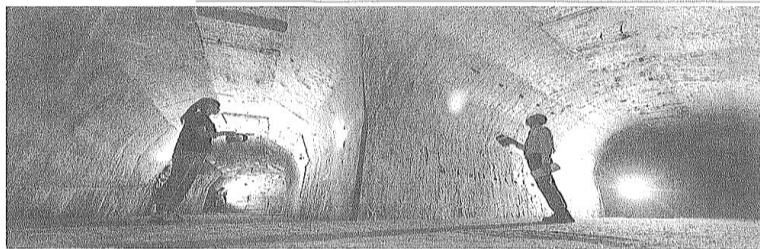
The conditions for those leading the war contrasted with those of ordinary people.

Akuzawa said what struck him the most as a teacher was the fact that the university was used as a war command center to send students to the battlefield. A Keio University graduate himself, he did not know about the tunnels until he started teaching at the high school.

He felt emotionally shaken when he thought of those students sent to war were just like these boys," he said.

Sections of the navy tunnels at Keio were damaged in a development project a few years ago, prompting experts and volunteers to call for more support from the city to preserve the site.

紙面価格 紙面1枚100円 本紙部 5,738円(税別) 4,037円(税別) 1紙部 1,500円(税別) 1紙部 1,500円(税別) 1紙部 1,500円(税別)



キャンパス地下 眠る海軍司令部

戦艦大和の沈没を受信

慶応大学キャンパス(横浜市港北区)の地下に眠る日本海軍連合司令部の地下壕が、戦艦大和の沈没を受信した。戦艦大和は、本誌の発行に際して、戦艦大和の沈没を受信した。戦艦大和は、本誌の発行に際して、戦艦大和の沈没を受信した。

慶応大、日吉で報道公開

地下壕は、1944(昭和19)年9月、連合司令部が、戦艦大和の沈没を受信した。戦艦大和は、本誌の発行に際して、戦艦大和の沈没を受信した。戦艦大和は、本誌の発行に際して、戦艦大和の沈没を受信した。



戦艦大和の沈没を受信した。戦艦大和は、本誌の発行に際して、戦艦大和の沈没を受信した。戦艦大和は、本誌の発行に際して、戦艦大和の沈没を受信した。

「同じ経験 若者にさせぬ」



70年前の電信兵・大島久直さん

大島久直さんは、70年前の電信兵でした。戦艦大和の沈没を受信した。戦艦大和は、本誌の発行に際して、戦艦大和の沈没を受信した。戦艦大和は、本誌の発行に際して、戦艦大和の沈没を受信した。

戦艦大和の沈没を受信した。戦艦大和は、本誌の発行に際して、戦艦大和の沈没を受信した。戦艦大和は、本誌の発行に際して、戦艦大和の沈没を受信した。

報告

平成27年度地域のチカラ応援事業チャレンジコース」結果報告

運営委員 小山信雄

昨年に引き続き、本年度も港北区地域のチカラ応援事業「チャレンジコース」に、事業名「日吉台地下壕見学会のガイド養成(人材育成)」に応募し、5月に補助金交付決定通知を頂きました。私達の会は今年で26年目を迎え、見学者も昨年末迄に27,146名を数えました。2009年には3,000名近くまでとなりましたが、見学者に対応出来るガイドの人数不足により、2010年以降は2,000名以上の見学者を呼ぶことが難しくなりました。

特に今年は「戦後70年」という節目の年を迎えていることもあり、「戦争」に対する関心の高まりから見学希望者が増加傾向となっているため、新しいガイドの養成は喫緊の課題です。今年度以降も、毎年ガイド養成講座を開催し、ガイドの人数を増やし、見学会の回数・見学者増やし、同時に全ガイドの質の向上を図って、日吉台地下壕を一人でも多くの人に知ってもらえるよう努力します。

今回の決定、及び懇話会委員の皆様からの暖かい励ましの言葉をより一層の励みとして、私達は、これからも港北区の地域の学び場の一つとして、港北区のみなさまをはじめ、沢山の方々への広報に努め、地道に活動を継続してゆきます。

お知らせ**港北図書館でパネル展&講演会を開催します！**

運営委員 小山信雄

8月1日(土)から16日(日)の半月間、菊名にある横浜市港北図書館1階の“港北まちの情報コーナー”にて“日吉台地下壕パネル展”を開催します。昨年12月に第一回目を開催し、連日大勢の方々に見学頂き、地下壕に対する関心を深めて頂きました。今年は「戦後70年」の年でもあり、さまざまな意味で「戦争」に対する関心や取り上げられ方も大きくなってきているように感じます。

日吉の大学キャンパスに残る貴重な戦争遺跡について、少しでも多くの方々に知って頂き、戦争や平和について見つめ直す一助になればと願っています。8月9日(日)14時から同図書館2階の会議室で講演会も行いますので、多くの方々の参加を期待しています。

報告**「横浜大空襲から70年—2015平和のための戦争展inよこはま」開催**

吉沢ティ子 平和のための戦争展 in よこはま実行委員

横浜大空襲から70年の5月29日から3日間、「平和のための戦争展」がかながわ県民センターで開かれました。

戦争による悲劇を忘れず、平和な21世紀を願い、「見つめよう 語り合おう 戦争の過去といま」をテーマに開催し今年で20回目。

展示会場は、入り口には平和のバラ、9条パッチワーク、横浜市非核宣言が挨拶とともに飾られ、横浜大空襲により焦土と化した市街の惨状、バラックの建物、ドラム缶の風呂など焼け出された市民の生活の写真が続きます。国家総動員の訓練の始まり・関東防空大演習、日吉台地下壕や横浜海軍飛行場などの戦争遺跡、占領下の横浜や米軍基地、米軍機墜落事故、ベトナム戦争の枯葉剤被害、戦後70年を考えるコーナー、講演にちなみ沖縄戦新聞など約500点が展示されました。5月30日の特別企画は、脚本家の小山内美江子実行委員長の挨拶と講演のあと、元琉球新報記者の山里盛智さんの講演。沖縄・琉球の歴史と辺野古新基地建設で揺れるいまを詳細な資料を用意して講演しました。70年前の沖縄戦は20万人を超える戦死者を出し、緑を一掃し地形を変えてしまうほどの国内最大規模の地上戦、いまでも体験者はPTSDに苦しんでいると言います。

琉球新報は戦後60年報道の一環としてその実相を伝える「沖縄戦新聞」を発行し新聞協会賞を受賞し今も伝え続けています。戦後は米軍による銃剣とブルドーザーで命まで奪われ支配・占領・土地取り上げ、事件・事故の多発。沖縄の民意は「戦争につながる基地を造らせてはならない」ということ。いま辺野古新基地建設反対の島ぐるみの闘いが広がられています。遅くはない、戦争のない差別のない暴力のない未来を作ることとはできると締めくくられました。

5月31日の特別企画は、中高生と100歳のジャーナリスト・むのたけじさんとのコラボレーション。はじめに、昨年に続き川和中学校演劇部による朗読劇「証言2・横浜大空襲」。生徒たちと同年代の女学生だった方の体験や仮救護所となった学校での悲惨な状況を朗読。



中学生たちの朗読劇「証言2・横浜大空襲」
横浜市立川和中学校演劇部

戦争体験のない中学生にとって、朗読することで体験者の気持ちを感じ取り、語り継いでいければと一生懸命演じられました。NGOグローカリー(Y校生)は会の名前の由来を紹介し、「高校生が歩いて考えて発信する」活動を報告。地元の歴史から学び、戦争遺跡を訪問し証言を聞き戦争と平和を考えるフィールドワーク、地球上のいまの問題についても考える活動を報告しました。

むのたけじさんは敗戦の時、戦争責任を取る形でただひとり朝日新聞を退社し、週刊新聞「たいまつ」を立ち上げ、反戦の言論活動を続けてきました。「80年間ジャーナリズムを歩いてきたが、いまは大変な時期。第3次世界大戦を許せば、数百万の動植物を根絶やしにする。戦争とは敵国民をなるたけたくさん、なるたけ早く殺せば勝利する、庶民を一晩に10万人も殺すのが戦争、この事実をしっかりとみしめなければいけない。どうしたら、第3次世界大戦を食い止められるか、それはだれが戦争を計画し始めるのかははっきりさせることだ。英雄待望論はだめ！これでは救われない、自分たちの力で、手を取り合って解決していくことが必要。立派だなと思う人は、自分に誇りを持っている人、自分を大切にする人、他人を裏切らない人」。100歳のジャーナリストから会場あふれる参加者にたくさんのメッセージが送られました。



100歳のジャーナリスト むのたけじ さん

連載

地下壕設備アレコレ【14】

ネコ車と「猫攻め」ーコンクリート打設の実際ー

運営委員 山田 譲

4月22日に前田建設(株)OBの富士見会のみなさんの見学会がありました。私もガイドさせていただいて、建設業の専門家ならではのお話をいろいろ、うかがいました。終了後にも何人かの方から丁寧な考察レポートをいただき、たいへん参考になりました。新井様、榊原様、鈴木様のお3方です。また当日は加藤様からお話しいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。その中から私なりに新たにわかったことを紹介したいとおもいます。

地下壕(トンネル)のコンクリート打設(覆工あるいは巻立とも言うそうです)は、まず壁をつくり次に天井をつくり最後に床をつくります。壁は、掘った穴の内側に木製の型枠をつくって、そこと土壁の間にコンクリートを流し込みます。ここまでは今でも建設現場で普通に見られる光景です。問題は天井です。円型または多角形の型枠をトンネルの内側に組み上げるわけですが、そこにコンクリートをどのように流し込むのか。前回、Z8工法のことので書いたように、地上からあけた穴にパイプを入れて、直接型枠に流し込むのは無理があります。

これについては前田建設の方のレポートでは、30mの長さを落下させると、生コンクリートは小石（骨材と言います）とセメントが分離してしまうので、もう一度練り直すか、突き固める必要があるそうです。ですからZ8工法であけた穴を通して地上からコンクリートを落として、トンネル内の容器に受けるわけです。ちなみにコンクリートは、セメント、砂、小石に水を交えて練り合わせてつくります。水とセメントが反応して固まります。

容器に受けたコンクリートを、次に型枠まで運んでいって流し込むわけです。このコンクリート運びには、おそらくネコ車とよばれる一輪車を使ったとおもいます。私も若いころアルバイトでこの作業をしたことがあります。今はコンクリートポンプ車をつかって生コンクリートを流し込みますが、それ以前はこのやり方です。一輪車だとせまい踏み板の上を運ぶのに具合がいいわけです。高いところに運び上げるにも、これが好都合です。

コンクリート打ちの1回のスパンは場所によってちがいますが、これは型枠の跡を見ればわかります。食料倉庫の脇で、加藤さんと確認したところ2メートルほどでした。そこでは型枠の板が124 cmと80 cmの2枚連続で打設してありました。もっと長いスパンのところもあります。そして壁から天井へと移っていきコンクリートを押し込んでいくわけですが、問題は最頂部です。ここに果たしてうまくコンクリートを横向きに押し込めるのか、流れ出してしまうのか、これが私は疑問でした。トンネル最上部に細長い溝を上向きに掘っておいて、そこから型枠の中に上から流し込んだのではないかと推測していました。

というのは去年の安藤広道先生の調査で、天井最頂部の上にトンネルと同一方向に細長い空洞が見つかり、落盤の危険もありうるということで現在立ち入り禁止にしているところがあります。また航空本部等地下壕の開発工事のときに出入口を調べた時も、コンクリート躯体の上の少し離れたところに隙間ができていました。これは工事の跡ではないかとおもったわけです。

これについて前田建設OBの鈴木八郎さんは「トンネル天端（頂上部分）の巻立」は「両側壁下段から、段々と幕板（型枠板）を積上げながら、跳ね込んで（コンクリート打設のこと）巻き立ててゆきます。最後の充填は（天端、猫攻め）小窓から押込む格好になります。」と書いています。新井真一さんはこの「猫攻め」を「せめ猫」と書いています。

また壁厚が40 cmなのは隙間に人が入りこんでコンクリートを押し込むためではないかというお話もありました。しかし当時の物資不足のなかで、そんな余裕はなかったのではないかという気がします。むしろ、ひたすら耐弾強度を考えていたのではないかとおもいます。第3010 設営隊の伊東三郎隊長の回想記でも「ソ連の冷凍爆弾は地下三〇米までの浸透冷凍効力があるとの情報も入り」と書かれているくらいです。霞が関の海軍省の地下壕は、壁厚がなんと1.5m. だそうです。

他にもトンネル掘りの実際について、いろいろ教えていただきました。これについては、また改めて書きたいとおもいます。

訃報

運営委員の岩崎昭司さんが6月、逝去されました。会の草創期からの会員で、20年以上運営に関わり、見学案内や目立たない仕事をいつも笑顔で引き受けていました。全国大会や戦跡めぐりバスツアーにも積極的に参加し、日吉台地下壕に寄せる思いは強いものがありました。ご冥福をお祈りいたします。

★活動の記録 2015年4月～7月

- 4/29 ガイド学習会(菊名フラット)
 4/30 地下壕見学会 日吉町婦人会 33名・会報120号発送(慶応高校 126番教室)
 5/3 平和のための戦争展inよこはまチラシ配布(横浜臨港パーク)
 5/9 ガイド養成講座⑤(来往舎中会議室)第9期修了者6名
 5/12 平和のための戦争展inよこはま実行委員会(神奈川県民センター)
 5/14 運営委員会(来往舎205号室)
 5/15 地下壕見学会 町田三田会 37名
 5/16 航空本部等地下壕(Bブロック1a)調査
 5/18 地下壕見学会 東京南部生協 9名
 5/22 地下壕見学会 東急バス労組 46名・平和のための戦争展inよこはま実行委員会
 5/27 地下壕見学会 手話サークル梅の会 19名・慶応高校生徒会 17名
 5/28 第20回平和のための戦争展inよこはま 展示準備作業(神奈川県民センター)
 5/29～31 第20回平和のための戦争展inよこはま開催(神奈川県民センター)
 5/30 定例見学会 47名
 6/6 日吉台地下壕保存の会 2015年度定期総会(来往舎シホ・ジウムスペース)
 6/10 運営委員会(来往舎205号室)
 6/13 ガイド学習会(菊名フラット)
 6/15 日吉地区センター地下壕講座① 42名(日吉地区センター)
 6/18 地下壕見学会 追浜発見クラブ 18名
 (6/23 慶應義塾の日吉台地下壕報道関係者向け特別公開 案内 阿久沢会長)
 6/24 地下壕見学会 慶応高校生徒会 16名
 6/25 地下壕見学会 日吉町自治会 27名
 6/27 定例見学会 53名
 6/29 日吉地区センター地下壕講座② 地下壕見学会 42名
 7/1 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会(法政第二高校教育研究所)
 7/2 地下壕見学会 パルシステムつむぎクラブ 44名
 7/3 慶応高校 40名
 7/6 慶応高校 41名
 7/8 慶応高校 40名
 (予定)
 7/9 会報121号発送

☆定例地下壕見学会 毎月第4土曜日 13時～15時30分(原則)

8月22日(土)・10月24日(土)・11月28日(土) (7月25日(土)・9月26日(土)は締切りました)

夏休み見学会 8月1日(土)9時30分・13時30分 (8月3日(月)・5日(水)は締切りました)

☆地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで TEL045-562-0443(喜田 午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子:〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里:横浜市港北区下田町 2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上
 発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921
 代表 阿久沢武史 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
 日吉台地下壕保存の会運営委員会